



2008 年 (平成 20 年)
2 月号 (No. 753)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

初の日中韓三国学生交流登山	
梅池高原に30人余集い開催	1
第9回秩父宮記念山岳賞を受賞して	3
科学委員会の歴史と現状	4
シンポジウム「現代登山とGPS」	5
「深い浸食の国」キングドン・ウォード	6
の世界へ	6
東西南北	7
マナスル三山展望の旅	
幻の南極観測船「やまと」	
モンタ・カンリ山群登頂	
支部だより	10
岐阜／東海	
活動報告	12
図書委員会／集会委員会／	
山の自然学研究会／01会	
追悼 エドモンド・ヒラリー氏	15
図書紹介	16
図書受入報告	16
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
新入会員	18
INFORMATION	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時

初の日中韓三国学生交流登山 梅池高原に30人余集い開催

吉永英明・宮崎紘一

この冬、北アルプス北部の梅池に、日本・中国・韓国三国の学生たちが、日本山岳会の呼びかけで集まってくる。相互の交流と雪山研修が目的だ。次代を担う若い人たちの山を舞台にした国際交流の意義は大きい。交流登山の直前、担当の理事にその概要を綴ってもらった。

日本山岳会(JAC)、中国登山協会(CMA)、韓国山岳会(CAC)による三国学生交流登山が2月21日から28日までの日程で、長野・梅池高原を中心に開催される。この交流登山は07年9月、ソウルで「韓国山岳会創立62周年記念式典」が行なわれた際、JAC宮下

秀樹会長が、CACの崔弘健会長

とCMA李致新副主席に提案し、2、3年ごとに各国持ち回りで実施していくことで合意し、さっそく実施に移された。第一回は日本で開催することになり、学生部が中心になって準備を進めてきた。

次代を担う学生たちが三国の交流登山、親睦を通して国際理解を深めるとともに、わが国の自然と

のふれあいによって、山岳環境保全の大切さを考える機会にしようというのが狙い。あわせて、各国の学生が現状を報告し、抱えている問題を話し合い、今後の登山の活性化に繋げることが期待される。

ベースは早大ヒュッテ

白馬岳周辺で適当な合宿場所を検討した結果、冬山歩行、スキー登山訓練にふさわしい梅池高原・神の田圃にある早大ヒュッテ(標高1700m)を借りることができた。ヒュッテには22日から泊する予定。

天候や積雪が安定していれば、乗鞍岳(2436m)の登頂を目指す。この会報がお手元に届くころ、学生たちは雪の山で合宿中ということになるのか。

来日するのはCMAから中国地質大学の楊絳梅体育部教師を団長とする同大学の7人(3人が女性)とCMAの顔金安副主席、協会交流部幹部2人の合わせて10人。北京にある中国地質大学は中国教育省に直属し、地質や資源、環境、地学工程技术などを中心に文経法などの学科も有する総合大学で、温家宝首相の出身大学でもある名門。

CACからは漢陽大、ソウル大、梨花女子大など7大学9人の学生とCACの邊裕根副会長ら引率の幹部3人、それに東亜日報の記者も加わる総勢13人だ。韓国の大学山岳部の登山レベルはきわめて高いとされるが、スキー技術の会得や後立山一帯の深い雪の経験に大きな期待を寄せているという。

一方、ホスト側のJAC学生部は立大山岳部の小山さやかさん(4年)ら8大学の10人で、このうち1年生が5人というフレッシュなメンバーだ。各地の主な大学山岳部に参加を呼びかけたが、今回は、結果として東京の大学に限られた。神崎忠男副会長らがアドバタイザーとして現地参加する。

合宿・自炊生活で交流

一行の来日は2月21日。成田空港から宿舎の国立オリンピック記念青少年総合センター(東京・代々木)に入って顔合わせし、翌朝、専用バスで拇池高原へ向かう。

スキーやワカン、スノーシューで早大ヒュッテに入る予定だが、場合によってはヒュッテ組と麓でのスキー練習組に分かれるケース



拇池・神の田圃にある早大ヒュッテ、後方の山は白馬岳

も考えている。韓国、中国ともスキーは初めてという学生が多いようだ。なお、山スキー用のスキー、靴などの調達に当たっては当山岳会同好会アルパインスキークラブの方々に協力をいただいた。

ご存知のようにヒュッテのある拇池・神の田圃付近は豪雪地である。今年の積雪はそれほど多くないようだが、3メートルを超えているという(2月14日現在、拇池ゴンドラ山頂駅で280センチ)。2月3日には近くの林間コース(立入り禁止)で、スキーヤーが雪崩に巻き込まれ2人が死亡する事故が起きている。

安全第一、慎重に合宿をこなし、スキーや雪山歩行の技術だけでなく、危険な雪の見分け方、雪洞掘り、雪崩ビーコンの使い方なども習得できるよう柔軟なスケジュールを組んでいる。一部はテント生活も体験する予定だ。

なお日本山岳会学生部では、27日夕、関係者も交えてオリンピック記念青少年総合センターで「さよならパーティ」を開き、親睦を深めることにしている。

JACとしては、この東アジア三国学生交流登山のために特別の

予算を組み、滞在費や国内での交通費などを計上した。

学生交流登山の歩み

参考までにJACが行なった最近の国際交流学生登山の歩みを振り返ってみよう。

*雪宝頂登山 1999年9月、日中友好20周年記念の「学生友好登山隊」日本側は宮崎絃一隊長以下9人、中国登山協会側8人。四川省の雪宝頂(5588メートル)に登頂した。関東5大学の、女性1人を含む山岳部員が参加した。

*仁寿峰岩登り登山 2000年10月、韓国学生山岳連盟の協力により、ソウル郊外の北漢山(ブカソンサン)国立公園にある韓国有数の岩場・仁寿峰(インスボン)で両国の学生らが岩登り訓練を行なった。

*新潟・湯沢でスキー合宿 2001年3月、韓国から女性2人を含む6人が来日し、湯沢スキー場で日本側の10人と交流合宿した。

このほか、大学や山岳会支部、グループ単位で中国、韓国と合同登山が多数行なわれているが割愛する。

第9回秩父宮記念山岳賞を受賞して

松本徂夫

2007年12月1日の年次晩餐会で光栄な本賞を受賞した。同時に永年会員章をいただき、私としては二重の喜びであった。受賞の業績は「崗日嘸布山群の踏査と研究」としてある。対象になったのは権歌書房から昨年4月に発行した『ヒマラヤの東 崗日嘸布山群踏査と探検史』（松本徂夫・編著、辻和毅、渡部秀樹・著）である。先輩からの教え

振り返ると、終戦直後に登り始めてから、山の先人や仲間たち、山岳図書から種々のことを学んだ。



年次晩餐会で講演する松本徂夫氏

とくに先輩たちの山や探検への思想や行動を私なりに受け止めての山行が、今回の受賞に結びついたと思っている。私を育みお世話になったすべての方に感謝するとともに、この喜びを分かちあいたい。

1955年前後、祖母・大崩山群や屋久島に集中したころ、加藤数功、立石敏雄両氏の指導を受け猟師を知ることになった。彼らと行動を共にすることもあり、山名、谷名を聞きとり、歩き方、泊まり方などを学習した。この方法が崗日嘸布山群の山名聞きとりとなった。1958年、横有恒氏の九重山行にお供した。そのおり「山を尊び山を愛し山と共に生く」の色彩をいただいた。氏の謙虚さ、山岳愛尊、自然との共存精神に感動し、当時、山岳保護運動に関係していた私には自信にもなった。

1965年、今西錦司氏らと数日間の山行を共にして、パイオニアワークや探検学を学んだ。そのころ、深田久弥氏に、その後吉沢

一郎氏、諏訪多栄蔵氏から山岳地図や山峰同定について学んだ。また「真の登山家によく読みよく登りよく書く」との示唆を受けた。未踏の山群

以上の教訓を肝に銘じ、私の探検的登山と踏査はヒンズークシユ、南極（第16次越冬、福島岳登頂）、中国ほかに及んだ。中国では、横断山脈、唐古拉山脈（6621メートル）、各拉丹冬峰初登頂など、可可西里山脈（ヘーディンのオスカール峰を崗扎日と同定）、西域各地の踏査を重ねてきた。これらは5冊の単行本として出版し、公表した。

以上の諸踏査の延長として、2001年から本会福岡支部の崗日嘸布山行となった。私としては「青蔵高原・西域の踏査と研究」という大テーマの一環でもあった。この山行を05年まで毎年続けてまとめた単行本が、今回評価された。山群の踏査にあたっては、横断山脈研究会の中村保、斎藤惇生、平井一正各氏に情報や資料をいただいた。ご協力にお礼申しあげる。

崗日嘸布山群は総延長280キロあり、概要は受賞図書によりほぼ説明できたと思う。本書は「自然・人文編」「探検史編」の二部構成に

して、多くの新知見を述べている。山群には最高峰6882メートルの白日嘸（若尼峰、チョムボ）のほか6000メートル峰が約30座、5000メートル峰が160座ほどある。このうち山名があったのは10座ほどで、今回36座37新山名を解明し、これらを地図上に示した。ほかの150座ほどの山名は不明のままである。山群への興味は単に山峰のみに限らず、探検すべき山域でもある。とくに山群南側の崗日嘸布曲崗日嘸布拉崗日嘸布蔵布（江別塘）のコース、主稜を越える峠のスイラ（ラグーンシユウ）やチンドウラ（江別塘達興）、アタカンラの南側などは、1913年のベイリーとモースヘッド、1930年代のキングドン・ウオードやコールバックらの探検以降記録はない。

山群の山峰はすべて高峻山岳であり、これというピークはまったく登られていない。まさに未踏の秀峰・鋭峰が連立する憧憬の山域である。そのほかにも探究すべき自然や人文に関する課題も多い。近年ようやく注目されるようになった崗日嘸布山群であるが、今後ますます世界の登山家や探検家が入域するようになるだろう。

委員会紹介

科学委員会の歴史と現状

科学委員会は1979年3月、西堀栄三郎氏が山岳会会長の時代に「科学研究委員会」として発足した。「日本山岳会百年史」に中村純二氏が「山の科学と日本山岳会」と題して当時の事情を執筆しておられる。

*

科学研究委員会の設立の理由は、それまで他の委員会が独自に行なってきた科学的文献収集、講演会、研究会などを科学研究委員会に一本化して積極的な山の科学の研究を行なう委員会とするという位置づけで立ち上げられた。

そして、①登山者自身による調査と実地体験、②登山を通じての探索の喜びや充実感の獲得、③山の科学の文献の収集、④会員相互の交流の促進、の4項目がとりあえずの目標として設定された。

これまでにマッキンリーの気象観測登山、ミニ水力発電などの実践的な研究を行なった。だが、ラボを持たない日本山岳会にとって、研究はやはり大学、研究所で

行なうべきもので、「科学研究委員会」の実態は会員に対する知識の普及、啓発が主たる活動であるため、1995年に「科学委員会」と名称を変更して現在に至っている。

現在の科学委員会の定例的活動

シンポジウム

雪崩、山岳通信、登山用具、気象、GPS、食料などのテーマで、識者に依頼して、シンポジウムを精力的に開催してきた。最近のトピックスは「中央分水嶺踏査」であった。この企画によって全国支部の活性化が顕著になったという評価をいただいている。

最近行なったシンポジウムには、「現代登山とGPS」(5ページ参照)がある。

探索山行

山の植生、塩の道、山岳通信、地質・地形などテーマを定めている。そのテーマに相応しい山について、講師による講演とその山を

登る企画も長期にわたって続けられている。

講演会

ルームで開催する講演会は年に2-3回、行なわれている。夏山の気象、マッキンリーの気象、サブリメント、氷河地形、日本の山・世界の山、靴や衣類などの登山用具など多岐にわたっている。

気象観測

森武昭氏が指導する「ミニ水力発電」は、現在、科学委員会の下から離れたが、大蔵喜福氏を中心とする「マッキンリー気象観測」は06年から電源開発(株)の補助金を受けて再び科学委員会の管理下において活動を行なっている。

今後の活動方針

これまでの活動は首都圏中心であり、全国の会員に益するところが少ない点が問題であった。今後の活動方針として、私見ではあるが次のように考えている。

(1)全国の支部から科学委員会の協力委員を選任していただいて、各支部が持っている科学情報を、科学委員会ならびに協力委員から

なるITのネットワークに配信していただく。ネットワークに配信することで、全国的な情報の共有ができるものと思われる。

(2)現在は科学委員会だけでテーマを決定しているシンポジウム、探索山行、講演会について、支部から意見を述べていただくことによって、日本山岳会会員が科学委員会に期待することを実現することが出来るのではないだろうか。

(3)各支部と協力しつつ、山の科学に関する情報のデータ・ベースを作成する。データ・ベースに取り入れる文献の選択については科学委員会の力だけで出来るものではない。会員諸氏に広く教智をお借りしたい。これは単年度で出来ることではなく、極めて長期的な取り組みを必要とするであろう。

(4)科学委員会の活動記録を年報のような活字を媒体とした形で残す必要があるのではないかと考えている。

以上のような活動方針によって、科学委員会の存在意義を確認し、全国の会員に益する活動の出来る委員会でありたいと願っている。

(箕岡三穂)

シンポジウム

「現代登山とGPS」

平成17年の活動の一環として、恒例のシンポジウムが2月1日17時から東京体育館第一会議室で開催された。平日の夕刻という時間設定で参加者数が懸念されたが、非会員を含め76名の参加があった。現代登山においてますます存在感を増すGPSへの関心の高さが窺われた。

プログラムは箕岡委員長との挨拶、続いて、当日わざわざお出でくださった宮下会長にもひと言ご挨拶をいただいたあと、芳野超夫科学委員の基調講演「GPSの活用」



パネリストを中心に活発な意見交換があった

現状と可能性」で始まった。GPSの原理、地上での正確な位置を求めるためにアメリカ国防省が行なっている活動など、貴重な講演にうなづく参加者の姿が目立った。

初めに登壇した筑波大学附属高校教諭・山の展望と地図のフォーラム代表、田代博氏は「カシミールとGPS」という演題で講演された。「カシミールとは『可視見る』からネーミングされた景観描画ソフトです」との話を、思わず笑いが漏れる。GPSデータをカシミールに取り込むことで、デジカメ写真の撮影地の確定や山座同定に活用するなどの手法が紹介された。

2番目の講演は、大蔵喜福科学委員と宮崎絃一常務理事による「高所登山への応用」であった。マナスル、チョモランマ、マッキンリー、チョ・オユー登山において大蔵氏が収集したGPSデータを宮崎氏が地形図上に落とした映像が大画面で映し出された。トラックバック機能、ウェイポイントへのナビなど安全登山に大いに役立つばかりでなく、登山後に収集された諸データを分析すれば次回の山行に有効に活用される、などの指摘がなされた。

最後の講演は、安井康夫アルパインスキークラブ会員の「国内での使用経験」であった。登山やスキーでGPSを活用するにあたっての事前準備や山行中での留意事項など、経験に基づいた情報が述べられた。スキーシーズン中でもあり、この情報は実用面できわめて有効なものであった。

休憩後、芳野氏の司会で「GPSの賢い使い方」をテーマに講演者全員でのパネルディスカッションが持たれた。安全登山のためには大いにGPSを活用すべきだが、それによって地形図が不要になる、

ということは決してなく、読図力や地形図上での位置確認をする力を磨く必要性のあることを、異口同音に指摘されたのが印象に残った。

参加者からも活発な質問が相次ぎ、予定した時間を超過して盛会のうちに閉幕した。

(平野裕也)



新刊 ◎京の秘境・芦生の森ガイドの決定版! ◎

由良川源流 芦生原生林生物誌

渡辺弘之 著/A5判/184頁/予価2100円(2月20日刊行予定)

由良川の源流にひろがる京都の秘境・芦生の森に生育する動物・昆虫・植物などを、四十有余年にわたり観察・調査・研究してきた著者が、貴重な写真をまじえて現況を紹介し、原生林の保全と保護を訴える。芦生研究林元林長による待望のガイドブック。

日本山岳会創立100周年記念出版

新日本山岳誌

日本山岳会 編

菊判/1992頁/18900円/クロス装 カバー掛け 函入
今世紀最新・最大の山岳事典。北は国後・択捉から、南は南西諸島まで4000山を網羅。写真や地図をふんだんに使った登路図の解説から、山名の由来、山の信仰や歴史・民俗まで詳しく紹介する。

※日本山岳会の方は直接お申込みください。会員特別割引有り。

〒606-8161京都市左京区
一乗寺木ノ本町15

ナカニシヤ出版 TEL.075-723-0111
FAX.075-723-0095

<http://www.nakanishiya.co.jp/> (表示価格は税込)

「深い浸食の国」キングドモン・ウオードの世界へ

中村 保

世界で最後に残された未踏峰の

宝庫「ヒマラヤの東―チベットのアルプス」は、東チベットから雲南省、四川省にかけて広がる。

そのなかで横断山脈の核心部である「深い浸食の谷」は、アジアの五つの大河がわずかに150^{キロ}の間を互いに接して南流する。ゴルジュは深く、山嶺は高い。中国では「三江併流」(金沙江、揚子江、瀾滄江)メコン川、怒江、サルウィン川)と呼ばれ、その驚異の景観ゆえに2002年にユネスコの世界自然遺産に登録された。

*

「塩井から北西に旅すれば、どちらを向いても高く聳える氷雪の峰々と対峙するだろう。そこはイラワジ川源流の彼方まで、果てしなく重畳と広がる未知の領域であり、植物学者にとって無垢の楽園である」(キングドモン・ウオード、1922年の旅)。プラント・ハンターのパラダイスは知られざる高峰、独特の風土の吸引力のある世

界でもある。

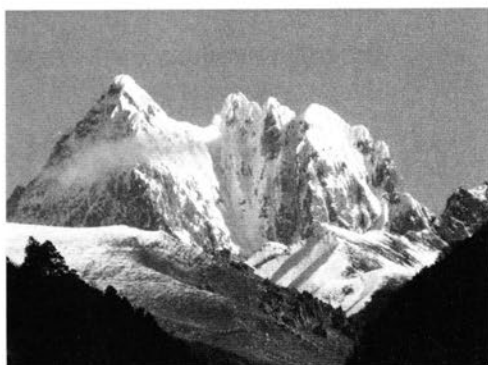
07年11月、横断山脈研究会の5人の仲間と初冬の1カ月間、雲南省から東南チベットへ出かけた。

豪壮なサルウィン峡谷を北上し、東チベットで最も美しい森林とゴルジュの谷、チベットの神秘の川・玉曲に入った。そこは魅力尽きないキングドモン・ウオードの憧憬の地。チベットでは温暖で豊か、美形の多いツァワロン地方である。

16頭の馬のキャラバンを編成し11日間の踏査の旅を行なった。100年ぶりの大雪で計画変更を余儀なくされ、泊まったチベット族の家の煙に悩まされ、全員風邪に苦しんだが、一応の成果は持ち帰ることができた。そして、3つの山群(すべて未踏峰)の写真を初めて世界に発信することができた。次に、その3つを紹介しよう。

伯舒拉嶺

北部はブラマプトラ支流(ロヒト)／ツァンポー支流(パルン・



ダムヨン主峰の南東に連なる岩峰(5800^{メートル}) 南面

ツァンポー)とサルウィン川の分水嶺、南部はイラワジ川とサルウィン川の分水嶺を形成する長大な山系。顕著な三つの山塊、すなわち①楊巴必松(ヤンバイスム、6005^{メートル})、②查格腊子(チャゲラジ、6146^{メートル})、③木孔雪山(ムコン雪山、6005^{メートル})が特に注目を引く。

サルウィン川・玉曲分水嶺の山群サルウィン川とその支流の玉曲の分水嶺をなし、5400〜5800^{メートル}の峻峰が連なる。

他念他翁山／怒山

サルウィン・メコン両川の分水

嶺をなす長大な山系である。南部が壮麗な梅里雪山(6740^{メートル})を擁する怒山、北部が女神の山ダムヨン(大米勇、6324^{メートル})とドウンリ・ガルボ(6090^{メートル})の峨々たる山塊がある他念他翁山。

*

なぜ「ヒマラヤの東」に通うのかと聞かれたら「仕事でも山でも新しいプロジェクトを考え、つくり上げてゆくのが主義。大方の人は有名などころでなければ行かない。僕は逆に知られていないから行きたい。新しい発見がパイオニアの心を打ち、次の旅へと駆り立てる」と答えている。

お蔭で、内外で認知され評価されるようになったのは嬉しい。

ミック・ファウラーは早くもダムヨンに目をつけ問い合わせをしてきた。伝統あるアルパインクラブ(英国)は、今回の踏査行をメイル・ニュースで発信し、木孔雪山とダムヨン主峰と隣接する岩峰の3つの未踏峰の写真を紹介している。これらのピークへの挑戦は、同クラブの遠征助成の対象になるだろうと報じている。さすがはアルパインクラブである。

老年探検家冥利に尽きる。

N — 東 西 北 — — 南 北 — S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

マナスル三山展望の旅

芳賀淳子

日本人が初めて8000メートル級のヒマラヤの山に登ったのは、もう50年を超える昔となった。その山の名は「マナスル(8156メートル)」。1956年、横有恒隊長に率いられた第三次日本隊は、第一次、第二次に続く3度目の挑戦の結果、とうとう頂上に立つことができたのだった。

06年12月、マナスル登頂50周年の記念祝賀会がネパールの首都、カトマンズで行なわれた。ネパールと日本の絆はまさに、マナスルによって始まり、その後、多くの日本人がヒマラヤの山々を目指して、ネパールを訪れるようになった。戦後の日本人に、登山の楽しさをひきだしてくれたのも、マナ

スルだったといえる。そんな意味をこめても、両国が50周年を祝い、さらに友好を深める機会であったといえる。

私がマナスルの名を知ったのは、父・三田幸夫が、第一次マナスル登山隊長を務めた時からである。当時中学3年、15歳の少女にとつて、ネパールヒマラヤは、私たちの家族にとつて大切な父の命を奪いかねない危険な冒険の地に思えた。1953(昭和28)年といえば、外国はまだまだ遠く、人々は戦後復興の真っ最中で、食べていくのも精一杯の時期であった。不安と少しの期待の入り混じった複雑な気持ちで、もう、今では覚えていた人も少ないBOAC機に乗り込む父を見送った。

当時の登山隊は350人余のポーターとヤクに荷物を運ばせる大キャラバンで、深くそして狭い峡谷を登り、ベースになるキャンプ

を作った。高所へ向かって氷河にひそむ深いクレバスをよけ、氷壁を攀じのぼりながら、いくつかのキャンプを作つて頂上へ向かったのである。

その第一次隊は惜しくも頂上へ3800メートルを残して、登頂をあきらめたのだった。

私はマナスルの父から幾度も、手紙をもらつた。キャラバンの朝の忙しい出立の光景や、ベースキャンプの草原で摘んだサクラソウの押し花、テント場から見える7000、8000メートルの白いヒマラヤ壁の屏風のような山の姿のことなどが書かれてあつたのを思い出す。



左からマナスル、P29、ヒマルチュリ(スケッチ=芳賀淳子)

父を通して知ったマナスルは、この50年の間、私にとつてかけがえのない大切な、しかし、会ったことのない山であった。その山に対面できるのが、この50周年記念祝賀会に参加した、私にとつての大きな目的であった。それは、祝賀式のあと、マナスル、P29、ヒマルチュリの三山の見える場所へのトレッキングが組み込まれていたからだ。このマナスル三山は、どれも日本人によつて登られている、日本人のヒマラヤである。

テント場に着くと、そこには、夢ではないかと見まがうほどの三山の姿が、荘厳に、気高く、屹立していた。左からマナスル、P29、ヒマルチュリが夕暮れのまさに日の落ちんとするピンク色の空に並んで、私を出迎えてくれた。やがて、空は薄い紫色に変わり、山々は濃紺のシルエットに変わっていくのであつた。ああ、やつと会えた父の山。なんと美しい姿であるう。思わず、涙がほおを伝うのを、抑えることは出来なかった。

翌朝、まだ日の出ないうち、空には星さえ残っている早朝、スケッチブックと絵の具をかかえ、テントを這い出す。良い場所に位置

をとり、モルゲンロートに染まる三山を描こうと身構えて待つ。薄く空が茜色に染まり、小さく点のように太陽が姿を現わすや、金色の光が山頂を照らし、それは見る見るうちに山全体を覆い、息を飲むような色彩の変化を見せてくれた。あつという間の、瞬間ともいえるような短い時間であった。スケッチの仲間は夢中で、その瞬間の山々を絵筆に捕えようとしている。が、誰もが、捕えようのない自然の前に、自分の無力さを実感しているに違いないと思った。

その仲間に、ヒマルチュリを初登攀したサミッター2人ともう1人の登頂者がいた。老登山家となつたサミッターの1人は静かに山と向き合い、スケッチに余念がなかった。再びまみえた若き日の山との対話は、私の想像のはるか及ばぬ、深く、重いものであつたろう。

幸い、3日間の滞在は快晴続きであつた。それぞれが、思い思いの形で、この山々との出会いを楽しんだ旅であつた。

少なくとも、私にとつては、この「50年節目の旅」のお蔭で、生きてきた歳月をいま一度振り返り、

別れ、困難、悲しみなどという、言つて見れば否定的な部分を、もつと肯定的に見直す不思議な力をもらつたような気がする。元気をもらつて帰国できたことは、大きな収穫であつた。

幻の南極観測船「やまと」

佐野忠則

「宗谷」「ふじ」「しらせ」に次ぐ四代目の南極観測船の船名も「しらせ」に決まつたと報じられている。わが尊敬する白瀬中尉の名が残ることになら異存はないが、やや無然たる思いもある。

25年前、老朽化した「ふじ」の後継船の名は一般公募された。その時、圧倒的に多い応募名は「しらせ」ではなく「やまと」であつた。これは当時の人気アニメ「宇宙戦艦ヤマト」に由来しているようである。南極観測船は海上自衛隊所属で自衛艦隊の命名の基準によれば、砕氷艦は「名所旧跡の名」から命名することとなっている。25年前の命名の折、一番人気の「やまと」が採用されず、また人名を

採用することができないにもかかわらず「しらせ」となつたのは、選考委員会の裁定により中尉の命名した白瀬氷河にちなみ「しらせ」と命名されたことによる。

今回一番多かったのは同じく白瀬中尉の命名した大和雪原にちなみ「ゆきはら」であり「やまと」も人気があつたようであるが、出身地の秋田県にかほ市の小学生の要望などにより、結局「しらせ」に決まつたとのことである。これでは前回も今回も何のために一般公募したかわからない。

白瀬中尉は愛知県豊田市で亡くなつており、私の母の実家が豊田市であることもあつて子供の頃から白瀬中尉の南極探検に興味があつた。私は北大へ進学後、先輩の勧めもあり南極越冬隊に参加できる大きなチャンスに恵まれた。だが、諸般の事情で参加しなかつたことを今でも後悔している。もし参加していれば、日本山岳会の中でもう少し大きな仕事ができただけではないかと思うと残念である。ところで、中尉は寺子屋の先生から教わつた北極探検の話に触発され探検家を志したが、その際の心構えとして、①酒を飲まない、

②タバコを吸わない、③茶を飲まない、④湯を飲まない、⑤寒中でも火にあたらないを教わり、生涯この「五つの戒め」を実行したといわれる。私は、これらのひとつも守れていないので、探検家になる資格など元々ないのかもしれない。

白瀬探検隊は政府の支援が全くないなかで、募金と借金で200トの海南丸を手に入れ、アムンゼン、スコットと南極点到達を競つた。残念ながら目的を達成し得なかつたものの、戦後の日本山岳会によるマナスル登頂以上に日本国民を熱狂させたといわれている。

いつの時代も、パイオニアワークは、もう存在しないのだから。

南極から帰還した白瀬中尉を待つていたのは借金地獄であつた。全国を行脚して得た講演会収入を返却に充てていたようだ。そして、日本の探検史上で最も偉大なこの探検家は、昭和21年9月、愛知県豊田市で極貧のうちに亡くなっている。

駅前近くの亡くなった場所には



モンタ・カンリ山群、左から第3峰、本峰、第2峰

今も「白瀬中尉終焉の地」という石碑が立っているが、知る人は少ない。ただその名は21世紀も南極観測船として残るだろう。

モンタ・カンリ山群登頂

田路繁男

モンタ・カンリ山群は中国チベット自治区ラサ市の南南西約200^{キロ}、ブータン国境近くのヒマラヤ山脈に位置する。立ち入りには許可が必要である。氷河に囲まれた山群は、本峰が6425^{メートル}で6000^{メートル}峰を複数有している。

07年9月5日から22日までの18日間、チベットの未踏峰、モンタ・カンリ山群に挑戦した。メンバーは、伊東亨（大分県）、木下会長他8名（飛驒山岳会）、宮本数男（福井支部）である。

9月5日、メンバーが福岡空港に集合。上海から成都を経由し、ラサへ入る。7日、1人が発熱、病院へ。8日は、装備チェック、食料購入、市内観光など。マツタケは13^{キロ}が20000円だった。

9日、四輪駆動車とトラックに分乗し、BCに向けて出発。ヤンチョ・ヨンツォ湖（チベットの三大聖湖・4441^{メートル}）は水の色が青く美しい。峠を越え、小川のそばにBC（4950^{メートル}）設立。夕食はマツタケご飯。10日、高度順応日。C1（5150^{メートル}）予定地まで往復する。

11日、BC→C1へ。13時過ぎにヤク15頭の荷物がC1に着く。飛驒山岳会の4人が三峰下部岩壁帯にルートを見つけ、ケルンを積みながら上部の尾根（5400^{メートル}）へ登る。

12日、C1→C2（5500^{メートル}）予定地へ荷揚げ。ルート工作隊4

人は、C2上部ルートへ出発。荷揚げ隊7人は、C2に登攀具をデポして下る。工作隊はC2上部に約200^{メートル}のフィックスロープを設置し下山。13日、C1→C2へ移動。昼前にC2到着。テント4張り設置。30分後に雪が降りだした。

14日、いよいよアタック。6時前に出発。約1時間後、岩と雪の混じった岩稜下部に着く。ハーネスとアイゼンを着けて宮本さんとザイルを組み、約200^{メートル}を登る。ガスの中、雪稜でホワイトアウト状態となり、平衡感覚がおかしくなる。ピッケルで足元を確認し、踏み外さないように注意する。6000^{メートル}は超えたとされる高度のせいか、立ち止まる時間が多くなる。登っても登っても同じような雪稜が続く。

12時35分、ついに雪稜の向こう側が低くなり、宮本さんとモンタ・カンリ頂上に立った。ガスの切れ間に、本峰（6425^{メートル}）がチラリとぞく。飛驒山岳会の6人の登頂を待ち、写真を撮る。13時30分、下山開始。16時20分、C2到着。

15日、宮本さんと2人でC2→

C1へ。16日、テントを撤収し、C1→BCへ下る。その後、18日までBCで過ごす。

18日、15日から我われと行動を別にし、本峰へアタックした飛驒山岳会のメンバー2名が登頂に成功し、BCに帰着。赤飯とカレーライスで祝った。

19日、BCを撤収しラサへ。ラサでは、買い物や、四川料理、観劇などを楽しんだ。

22日、上海経由で福岡へ、そして福井に帰省。

アンデスで最もやさしい6千m峰
ボリビアアンデス

ウトウルンコ(6008m)
登頂15日間

4/20発 ¥679,000
5/25発 ¥666,000

チチカカ湖・ウユニ塩湖も訪ねます

ATLAS TREK 株式会社
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋区千種区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

支部

だより

岐阜支部

権現の森林づくり

今年度の岐阜支部は、国土緑化推進機構「緑の募金」の助成を受けて、揖斐川流域住民による水源の「権現の森林づくり」を岐阜県と協働事業として着手した。

権現の森林とは岐阜県揖斐川流域源頭部にある奥山で、ブナ林帯に属している。かつて焼畑、炭焼きによる生業が営まれていて、奥山に生きる人々に生活の場と糧を与えていた。人々の営為が自然生態系と微妙なバランスを保ち、森林は生き生きとしていた。

しかしエネルギー革命と共に、伊勢湾台風(昭和34年)などを境に人々が奥山から姿を消してから、森林は顧みられることが少なくなつた。近年、カシノナガキクイムシによるいわゆる「ナラ枯れ」現象が蔓延し、奥山の森林は著しく

荒廃するに至った。

日本山岳会岐阜支部では自然に親しむ登山家として、揖斐川流域の上下流の人々に呼びかけ、荒廃した奥山の森林の再生を試み、あわせて森林の重要性を学ぶためにこの事業を行なう事にした。

第1回植樹は07年11月4日で参加者43名。作業内容は標高800メートル付近での前年から約30回にわたる登山道整備、植林地における枯れ木の伐採、下刈り等で、準備しておいた約3ヘクタールの中にブナ、ミズナラ、コナラ、キハダなど各70本を植樹した。

参加者の集まりを心配したが、事前のPR(新聞、町内広報、会員会友並びに山岳団体やスポーツ店での呼びかけ)のお蔭で当初の目標を上回る集まりがあった。幸い秋晴れに恵まれ和やかな作業となった。一部の方は権現山頂(1581メートル)まで足を延ばし、午後

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。



植林の作戦会議を行なう参加者

はヌタ場やトチの太木、炭焼き窯の跡などを見学し、紅葉真っ只中の森を散策し、午後4時に散会した。

第2回植樹は11月11日で、参加者40名。同地域にミズメ、イヌシデ、カツラ、エゴノキなど広葉樹の苗木各70本を、前回と合わせて630本の植樹を完了した。

矢中谷林道の車止めから苗木を参加者で分散し、植林地までおよそ2キロを1時間かけ担ぎ上げた。

午後は西條会員による専門的な林学の見地から自然観察を行なった。

第3回植樹は08年5月11日に、再び岐阜県「山の日」協賛のイベントとして、8月3日には「権現

の森林まつり」を予定しているので、全国から積極的な参加を希望します。

(中島眞一)

東海支部

猿投の森づくりの会
「トトロの森の探検隊」

『山』11月号13ページに小川務会員が報告した「森のフェスティバル」は、チャイコフスキー第五交響曲全奏と、森林観察会で大盛会だったが、いわばこれは成人向きの催しである。

「トトロの森の探検隊」は、フェスティバルのパートⅡで、子供たちが対象である。

07年11月17日、児童48名、保護者46名、教諭15名の合計109名が猿投の森、内院に集まった。今年にはコナラ、アベマキ、シイ、カシ類などブナ科のドングリが大豊作で、森を歩きながら子供たちは喊声をあげて、ほしだけ拾い袋に入れた。園芸用のスコップで森の腐植に富む土を掘り取ってポリエチレンの袋に入れた。家へ帰って植木鉢にドングリを植え、芽出しを見るためである。



森のフェスティバルに集った「トトロの森の探検隊」

その後、大協会員らが用意した枝打ちの廃材を利用した森の四足動物のクラフト作りに眼を輝かせた。鈴村会員と女性会員たちが作ったお汁粉がふるまわれた。間伐の廃材を燃やして作った燗で焼く餅が珍しいのか、焚火のそばに多勢寄ってきた。

猿投の森づくりの会の顧問をしている神戸洋美さんは、愛知県の県会議員とひなご幼稚園（春日井市）の園長という両刀使いである。環境問題を主政策に掲げておられる。今回の児童や保護者はこの幼稚園と、神戸さんの実妹の川地直美さんが経営する瀬戸ひなご幼稚園（瀬戸市）との合同イベントに

参加したのである。募集をしたら予定枠をはるかに越す参加希望があり、あわてて半数以下にしぼって何とか今回の109名に抑えたという。

感想を聞いてみると、男親も女親も、「子供も喜んだが、それ以上に自分たちが楽しんだ。またやってほしい」との意見が多かった。

また「山は登山道があるのでいつでも行けるが、道のない自然の森は引率者がいないと歩けない。途中にキノコなどいっぱい発見があった楽しかった」ともいう。

ルネ・デカルトのダイコトミー（三元論）によれば、知識には次の二つがある。

1・タシット・ナレッジ（暗黙知、内在知などと訳されている）。
2・エクスプリシット・ナレッジ（形式知、顕在知などと訳されている）。

暗黙知は五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、臭覚）を通して頭に入り、心に像を結ぶ知識である。書物や講話などでは身につかず、フィールド（自然環境）の体験を経ないと結像しない。理論や定理やデータ解析などを飛びこえて物ごとの本質へ迫る。

古来、すぐれた山のルートファインダーはことごとく皆、暗黙知による自然把握の達人だった。

他方、形式知は、理論、原理、データ、仕様書、方程式などの形式言語や数値を通して伝達され、理解可能な知識である。科学や知育には、この二つの調和のとれた発達が必要である。

自然現象は広く、深く、複雑で、形式知のみではとうてい把握しきれない。

幼少期に本物の自然を五感の働きのきで知った人は、成人になるころ、暗黙知でとらえた体験と記憶を基

にして自然観を感得するだろう。

その自然観は文明観を培育し、文明観を持つことによって人は正義感や使命感に目覚め、世界観を形成する。健全な人間の発達はすべて幼少期の自然体験に発する。幼少期森林体験イニシアチブである。このような考えから、猿投の森づくりの会では児童の森林体験を最優先のテーマのひとつにとり上げ、活動していきたいと思っている。

（橋村一豊）

ヒマラヤ環境調査トレッキング 参加者募集

世界の屋根ヒマラヤで、地球温暖化が山岳環境に及ぼす影響について考えましょう。

自然保護委員会・科学委員会

Aコース：エヴェレスト山群イムジャ氷河湖とカラパタル21日間 4月23日出発

東京・大阪発着 参加費（会員）43万円

*残席僅少

東京・大阪→カトマンズ→ルクラ→ナムチェ→チュクン→イムジャ氷河湖→チュクン→ロブチェ→カラパタル→往路を下山→ホテル・エベレストビュー→ルクラ→カトマンズ→東京・大阪

Bコース：イムジャ氷河湖観察フライトとエヴェレスト街道9日間 4月23日出発

東京・大阪発着 参加費（会員）39万円

東京・大阪→カトマンズ→ルクラ→ナムチェ→ホテル・エベレストビュー→ヘリコプターでルクラ→カトマンズ→ヒマラヤの氷河とイムジャ氷河湖観察

フライト→カトマンズ→東京・大阪

参加ご希望の方は事務局まで。資料送付します。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

図書委員会

第38回山岳図書を語る夕べ

07年11月19日、ナカニシヤ出版社長・中西健夫氏をルームにお招きし、「山岳図書の出版事情」と題して語っていただいた。1004号室が満席になる盛況だった。

ナカニシヤは、京都の丸善の洋書部に勤めていた父君が昭和3年に独立し、京都大学の前で開いた洋書専門の書店として始まった。当初から屋号は片仮名で、そのわけは明治初年の洋書販売店の歴史に遡る。ご両親の死後、高校3年生だった中西健夫氏が家業を引き継いだのが昭和30年。やがて書店業と出版業を併行し、25年ほど前から出版業一本になった。

家業のかたわら登山を楽しんだ。森本次男氏の驥尾に付して奥美濃に通いつめる。そのころ京大の先生方から話があつて出版したのが

『京都の秘境・芦生』1970年刊。

これがナカニシヤの山の本の嚆矢となった。はじめは自然保護がらみで京都周辺の里山や森林の本が主だったが、いつしか対象は近畿一円の山にひろがり、いまやその方面の山の本ならナカニシヤと言われるまでになる。90年代に入ると海外の山にも目を向け、その精力的でユニークな出版活動はご存知の通り。約1100点の同社刊行物のうち、10割の110点が山岳図書である。

という筋立てのお話を1時間半にわたって伺ったのだが、これがまことに興味あふれる内容だった。親の代から出入りの京大関係の伝説的な学者・岳人がつぎつぎに登場し、興のおもむくままに裏話、こぼれ話が披露される。その一方で「今西錦司先生の陰に隠れた偉い人たちの話」がもうひとつの主題となり、一中・三高・京大の「正



山好きの社長として知られる中西健夫氏

統派」とはちがった味の北山歩きのこと、その中心になった人々と本のことなどが、エピソードをちりばめて熱っぽく語られた。

やがて講演会はごく自然に懇談会へと移っていった。その主題は「山の本に未来はあるか」。なにしろ参会者は山の本の著者たちを含めて一家言ある人ばかり、多数の出版関係者の日頃の鬱憤もまじえて議論風発、話は大いに盛り上がった。

ナカニシヤは「ほかの本で儲かった分登山の本をこしらえている」という。いわば山好きの社長の道楽が、衰退気味の山岳図書出版の一角を辛うじて支えているわけである。この奇特で貴重な道楽

に参会者一同エールを送り、第38回「山岳図書を語る夕べ」は盛会のうちに終了した。いやあ、面白かった。

(平井吉夫)

集委員会

スキー懇親会

1月12日、ロッジ上野スキーへの到着はほぼ一番手だ。続々と参加者が到着して賑やかになる。1年ぶりに会う人も多い。早速ゲレンデに繰り出す。雪は善光寺平にはなく、小布施辺りからようやく見られた。ゲレンデも少なめであった。久々のスキーで太ももに筋肉痛を得て、やっとスキーに來たという感慨がわいてくる。

夜の宴会はいつもながら楽しい。関東周辺を中心に、北は越後、西は京都、東海までの総勢29名の参加者があった。懇親会に先立って集委員会幹事の高橋聰氏から挨拶があった。続いて、元副会長の芳賀孝郎氏、地元信濃支部会員の金子誠吾氏の挨拶があり、ビールで乾杯、懇親会が始まった。差し入れの日本酒などが振舞われ、場は盛り上がる。



若者にも負けないタフな中高年の参加者

13日の朝、夜からしんと降った雪は相当な新雪をもたらした。8時に朝食をとるとすぐにゲレンデに直行。上部のやまびこゲレンデに直行する長坂駅のゴンドラは、3連休の中日とあって行列ができ混雑している。しかし、機動力の飛躍的な向上で待ち時間は短い。終点のやまびこ駅からリフトで毛無山に向かう。昨夜からの雪と風で、ブナの樹氷が素晴らしい。50センチは積もっただろうか。新雪のバーンはスキーが滑らかに回転するのを助ける。スキーに乗り込んでいく感触を取り戻し、一段と上手くなったような気分になる。スキーヤーにとって粉雪は最高のも

てなしである。

スキー場マップを見ながら、あちこちとゲレンデを巡った。なかでもやまびこゲレンデは最高の雪質で、絶好のコンディションで滑走を堪能できた。スキーの後は、宿の隣にある松葉の湯に入った。熱めだが太ももの筋肉痛に効くように、痛みが楽になった。夜もまた宴会、あちこちで話に花が咲く。

最終日の14日、9時の記念撮影後、最後の仕上げとばかりゲレンデに向かう。ガラガラ長坂駅から、ゴンドラでやまびこゲレンデを目指す。平林節生氏のリードで新雪滑降を2本楽しんだ。リフトとリフトの間に整地しない深雪ゾーンがあり、浮遊感が素晴らしい。固められたゲレンデもいいが、深雪は山スキーへと誘う。山スキーこそスキーの王道である。午後になり晴れ間もでてきた。昼食後スカイラインコース1本を滑ってスキー板を納めた。

お世話してくださった集会委員の方々に礼を申し上げる。

(西山秀夫)

山の自然学研究会

すばる天文台とハワイ4島巡り

当研究会は「山はどうして高くなったか」をテーマとし巡検山行を重ねてきた。今回は、プレートテクトニクスを実感したく、火山の島ハワイ4島を訪問した。

07年11月21日、参加者20名は成田を出発。飛行機を乗り継ぎ、マウイ島カフルイに到着、クラ植物園で昼食。大型バスはあつという間に3000メートルのハレアカラ山頂で、同クレーターを眼下に見る。

帰路、イアオ渓谷に寄り、カメハメハ王の200年前ハワイ全島統一の戦いの話を聞く。

22日、ハワイ4島のなかで一番若い島・ハワイ島を訪ねた。現在、太平洋プレートは北西に年10センチずつ移動していて、ハワイ島のホット・スポットで出来た島々が、ハワイ・天皇海底火山群がカムチャツカまで繋がっているというから驚きだ。サーストン溶岩・キラウエア・イキカルデラをハイキング、ジャガー博物館の火山展望台で一望できる大カルデラを見て、ナチュラルガイドの熱弁に聞きほれた。

現在、ホット・スポットは島の南東部の海底に移動している。地球の壮大なドラマを実感し、感激に浸った。

23日、この日は4205メートルのマウナケア山頂登山の日だ。ヒロの国立天文台すばる観測所に立ち寄り予備知識を得る。2800メートルのオニズカセンターで昼食兼高所順応後、すばる天文台を見学。林准教授の説明に感嘆した。再度山頂に登り、太平洋に沈む夕日を眺め、その雄大さと寒さに身震いを感じる。

24日、4島めぐりの最北の島・

青海チベット鉄道とカイラス内院展望ハイキング16日間
5/20発 ¥685,000

Wec 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp



ハワイ島キラウエア火山にて

カウアイ島に渡る。この島は500万年前の火山活動の激しさと地形的にも各種の古さを見せてくれる。ワイルア河を遡行し、シダの洞窟を見学。ネイチャーガイド・ボビーさんのガイドぶりにすぐく勉強をさせられた。

25日、太平洋のグランドキャニオンといわれるワイメア渓谷をハイキング。太平洋のホット・スポットで島ができてから熱帯雨林に降った雨が溶岩台地を浸食。幅1.6km、全長1.6km、深さ1.1kmの大渓谷の自然を楽しむ。コケエ・パピリオンでのボビーさんの野外ランチはこの上なくおいしかった。

26日、ホノルルのあるオアフ島

に戻る。飛行機からは、例の真珠湾を見る。ピショップ博物館でハワイ王朝の歴史を勉強。ハワイ火山の展示を見ているうちに時間になる。ダイヤモンド・ヘッドの眺望は圧巻であった。

ホノルルから、28日14時40分、成田着。

「すばる天文台見学がハイライトと考えていたが、4島それぞれ異なる地形・植生を持ち、緑豊かな島・溶岩荒々しい島、これらの対比は予想外だった。ネイチャーガイド同行のハイキングに、自然を説明する豊かな話を楽しく聞けた。生きた火山の勉強の場であった」と参加者の感想である。

(船橋明)

01会

雪山登山

01会は、05年秋に行なった玉山登山に続き、07年10月26日～28日にかけて、第2回目の台湾登山として雪山登山を行なった。

参加者11名は全員登頂を果たし、無事下山した。登山日程は、26日、環山～三六九山荘。27日、三六九山荘～雪山～三六九山荘へ。28日、



雪山山頂にて参加者全員で記念写真

三六九山荘～雪山東峰～環山。

29日は、タロコ渓谷観光から東海岸に出て台北に戻る。夜8時より、中山協の黄宗和名誉理事長、謝長顯理事長、林哲全資訊組組長ならびに蔡禮榮名誉理事長夫人の李秀英女士の方々と共に夕食会を台北「欣葉」で開催。01会11名と周文先生を含め16名で有意義な宴会であった。お互いの山岳会のパッチを交換し、交友を深めることができた。

席上、平林丈彦01会副代表に対し、「攀登五岳三尖証明書」を中山協の謝長顯理事長から手渡された。台湾百岳クラブの準会員として承認された。日本人として初めての

顕彰であり、大変名誉なことである。

なお、今回も日本山岳会宮下秀樹会長のメッセージを携行し、夕食会の冒頭で上野美裕01会代表から中山協謝長顯理事長に手渡された。帰国後、返礼のメッセージは宮下会長に手渡された。

(平林丈彦)



車でめぐる東チベットと、世界最高所の青蔵鉄道

ナムチャバルワと聖なる湖・東ヒマラヤ大周遊と青蔵鉄道10日間

発着地 東京・大阪・名古屋・福岡

4/9(水)～4/18(金).....¥516,000

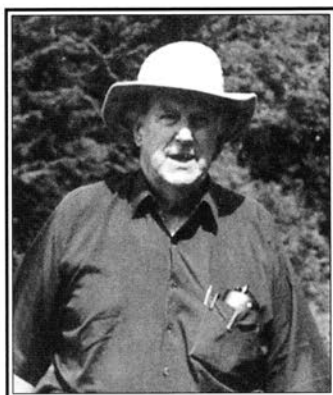
4/23(水)～5/2(金).....¥528,000

国土交通大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員 ©ボンド保証会員
ALPINE ツアー サービス 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル4階 ☎03-3503-1911

大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com



エドモンド・ヒラリー

1919年7月20日、ニュージーランドのオークランドに生まれる。マウント・クック南稜ダイレクト初登攀などの記録をもつ。1953年、イギリスのエヴェレスト隊に参加、5月29日、サーダーのテンジン・ノルゲイとともに、世界最高峰に初登頂した。その後も、ネパールに学校や病院などを造り、同国の近代化に貢献した。1997年、日本山岳会の名誉会員に推挙された。

1月5日、ベネズエラの最高峰ピコ・ボリバル(5007m)に登り、メキシコの日航ホテルに入った1月11日夜、NHKからの電話でヒラリー氏逝去のニュースを知った。

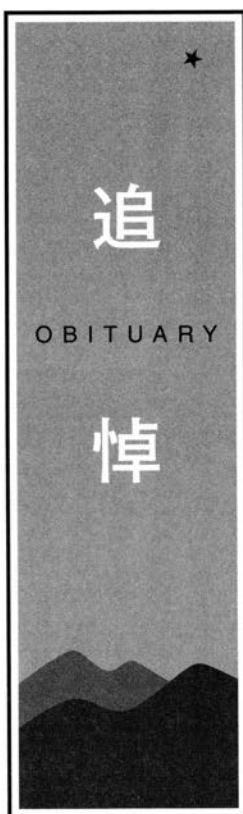
とうとうこの日が来てしまったと思った。2002年、国際山岳年の折に国連大学での講演をお願いした時、1度は来日可能という

返事であったが、健康上の理由で来日できず、オークランドの自宅から衛星中継でお話いただいた。

翌03年のエヴェレスト登頂50周年記念の行事でカトマンズでお会いしたときはお元氣そうに見えた。でも、椅子に座られている時間のほうが多く、ジェーン夫人は「あまり心臓がよくないの」と話されていた。カトマンズでの祝賀会後、ロンドンやサンフランシスコへの移動は専用機だった。サンフランシスコで一一緒に食卓を囲んだのがお会いした最後になった。

エドモンド・ヒラリー氏を偲ぶ

田部井淳子



私のところに毎年各国の人からサインしてほしいという手紙が届く。私の前にヒラリー氏からサインしてもらったカードが入っているが、ここ2、3年ヒラリー氏の筆力が弱く字にぶれが感じられるようになり、健康を心配していた。氏の逝去を知り、「これで登山の時代が終わった」というのが実感だった。

私たちがエヴェレストに登った1975年のこと。南峰からガクンと1度下る、ヒラリーのチムニと呼ばれる岩場は最初かぶり気味である。その岩を抱えるようにして、左足をクラックに入れまわりこむ。その瞬間、人類で初めてこの高所でこの岩場を登ったヒラリーとテンジンはやはりすごい人たちだと思った。それまで遠い歴史上の人物だと思っていたヒラリー氏が身近に感じられた瞬間でもあった。

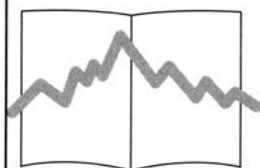
その年も、ヒラリー氏はクムジユンで病院建設のため自ら柱を打ちつける作業に取り組んでいた。そこを訪問しようとしていた前夫人と娘さんが、ルクラで飛行機事故で亡くなったというニュースに、私はすごいショックを受けた。

そんなことがあったにもかかわらず、「女子隊でよく登ったね、おめでとう」というメッセージをいただき、それ以来ずっと交流が続いている。

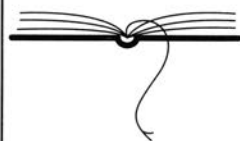
「これ以上美しい山を汚してはいけない。私たち登山者がそれを啓蒙してゆかねばならない」という氏の発案で、ヒマラヤン・アドベンチャー・トラストが設立された。日本山岳協会、日本山岳会、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤ協会の支援でHAT-Jが設立されたことをヒラリー氏は大変喜ばれた。

1997年の夏、青少年とともに尾瀬を歩き「冒険とは自分自身はまだ到達していない地点に向けて動くことだ。冒険心を追求し若い君たちが自然と向かい合い、未来に向かって自然を守ってほしい」と熱く語ったことを私は忘れない。

少年時代の自然体験の重要さと、若者たちが自然に向かうサポートをするのがおとなの役目だと言いつつヒラリー氏。その言葉を実践していくことが、残された私たち登山愛好者の使命ではないかと強く思う。



図書紹介



フリーマン・ハウス・著

駒沢敏器・訳

『トーテム・サーモン』 聖なる生命サーモンのおしえ



2007年11月発行
山と溪谷社刊
四六判 318頁
定価 2520円

主な舞台は、70年代末から20年間のアメリカ西海岸の1本の川、マートル川。都会を捨て、この川に住みついた「元ヒッピー」の著者が、絶滅しかけていた固有種のサーモンを復活させる。

彼は手探り状態でサーモンの人口孵化を続けるうちに、大きな生態系の一部としての川とサーモン（ひいては人間）の関係に目覚め、川を含む流域全体の環境を修復させる運動へと、活動を仲間を広げていく。行政との交渉、林業会社

や流域の牧場主との軋轢。それら一つ一つに悩み、解決の糸口を見つけ、粘り強く説得し、運動を広げていく。

大西洋型サーモンは川で産卵をする。次の年は海へ戻り、2度目の産卵のためにまた川へ戻る（3度のこともある）という。ところが太平洋型サーモンは雌雄ともに1度産卵するとその場で死んでしまう。そんな生態の違いをまったく無視し、アメリカでは西海岸から東海岸への強引なサーモンの移送と養殖が19世紀から行なわれ、それぞれの川や流域の固有種が絶滅状態なのだという。

そこに見え隠れするのは、古いものを蹴散らし破壊しながら近代化を突き進んできたアメリカの漁業の姿だ。そしてそれは、農業、林業の場においても同じだったに違いないと思われる。

著者は語る。近代化とそれに続

く乱開発でズタズタにされた生態系の復活の鍵は、サーモンと深く関わってきたアメリカ先住民の知恵と思想である。それはアイヌの人たちと鮭との長い関わりとして、私たち日本人にはなじみのある感覚だ。だとしたら、私たちはまだ間に合うのだろうか。

「トーテム（崇拜されるべき自然の象徴）・サーモン」という書名は、著者の祈りでもある。

（三好まき子）



山の仲間 K. Okano

図書受入報告 (2008年1月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
西堀榮三郎	技士道十五ヶ条——ものづくりを極める術(朝日文庫)	316pp/15cm	朝日新聞社	2007	出版社寄贈
小野有五	自然のメッセージを聴く——静かな大地からの伝言	311pp/19cm	北海道新聞社	2007	出版社寄贈
早川禎治	わが山、源流へのあこがれ(改訂版)	324pp/21cm	北の野帳社	2008	著者寄贈
志田郁夫	山に魅せられて——志田郁夫写真集	96pp/20cm	志田郁夫(私家版)	2007	著者寄贈
水越武	知床 残された原始——水越武写真集	166pp/23x31cm	岩波書店	2008	出版社寄贈
田辺治(編)	K2からローツェへ	158pp/26cm	日本山岳会東海支部	2008	発行者寄贈
国枝忠幹 他(編)	JAC Hiroshima (No.26)——日本山岳会広島支部創立10周年記念号	136pp/30cm	日本山岳会広島支部	2008	発行者寄贈
Harish Kapadia	Exploring the Hidden Himalaya (3rd Revised & Enlarged Ed.)	224pp/23cm	Indus Pub.	2008	出版社寄贈
A.A.Bern	Akademischer Alpenclub Bern 102. Jahresbericht (Nov.2006-Okt. 2007)	40pp/21cm	Akademischer Alpenclub Bern	2007	発行者寄贈
Harish Kapadia (ed.)	The Himalayan Journal (Vol.63, 2007)	318pp/22cm	Himalayan Club	2007	発行者寄贈



平成19年度第9回(1月度)理事会

日時 平成20年1月23日 18時30分～21時

場所 日本山岳会会議室

【出席者】宮下会長、鰐坂・神崎各副会長、吉永・宮崎・成川各常務理事、齊藤・藤井・石橋・古野・太田・堀井・相馬・岡部・山川各理事、深川・竹中各監事、河野・近藤各常任評議員、神長会報編集委員長

【欠席】日下田常任評議員

●新年の会長挨拶の後、議事に先立ち新任の事務局職員紹介と退職した職員の紹介があった。(新任・時田真理、退職・深田由貴子、吉田明子)

【審議事項】

1・「山岳」写真転載許可願

越後支部小田辰兵衛会員より、自身の所属する山岳会「阿賀山の

会」創立10周年記念機関誌に山岳第5年第1号38ページ「九絶巔」の挿入写真ほか。(承認)

【報告事項】

1・エドモンド・ヒラリー名誉会員逝去に伴う弔電(神崎)

1月22日、ニュージーランド、オークランドにて葬儀が行なわれた。

2・森作り連絡協議会報告(吉永)
1月12日、東海支部ルームで開催された。

11支部中7支部が参加し、活発な意見交換があった。現状の一覧表の作成を依頼。

次回、岐阜で8月23日開催予定。
3・山岳会ルームの定期清掃(宮崎)

前業者の都合でしばらく休止していた清掃を日本コミュニケーション株式会社と契約。平成20年2月より毎月1度実施する。

4・放送大学テキストの内容について問い合わせ(吉永)

柴田会員より放送大学テキスト「NPOマネジメント」における本会関連記述について理事会の了承の確認についての問合せがあった。一部手続きの不備があり誤解を招いた旨、書面で回答し了解を得た。

5・平成19年度第3・四半期財務報告(吉永)

昨年とほぼ同様に推移している。
6・支部・委員会の事業報告と事業計画・予算請求書について(吉永)

表記について今年度から公益目的事業6項目と共益事業(会員対象)と区分し、記載してもらうこととした。なお、各資料は電子データで整理したいので協力していただきたい。

7・「日本山岳会しおり」の改定について(宮崎)

新入会員用の「しおり」が2003年発行以来改定されていないので、総務委員会が発行準備を進めている。「会の案内」も検討する必要があるとの意見があった。

8・富山支部創立60周年記念式典・祝賀会の案内(宮崎)

3月23日、富山第一ホテルで開

催。宮下会長 神崎副会長出席。
9・08年度自然保護全国集会の案内(山川)

4月19日、20日、千駄ヶ谷東京体育館で開催。

「高山帯におけるシカの食害と対策」など。

「山の環境アンケート」を実施し結果を発表する。

10・「ヒマラヤ環境調査トレーニング」と「講演会」(山川)

自然保護、科学委員会の共催で行なわれる。

●環境調査トレーニング

4月23日～5月13日、慶応大学福井研究室のイムジャ氷河湖で行なわれている地球温暖化の影響調査に協力するトレーニングを行なう。短期間のコースも企画予定。

●講演会2月2日

「地球温暖化とヒマラヤ氷河湖の拡大」慶応大学教授・福井弘道

「ヒマラヤの氷河地形について」

科学委員会・小嶋尚

「数字が語る地球温暖化」自然保護委員会・西田進

11・「山岳トイレ技術シンポジウム」開催案内(宮崎)

環境省自然保護局の主催で、2月26日、ミューザ川崎シンフォニ

ーホールで行なわれる。

12・会報編集報告(神長)

会報『山』1月号、2月号編集報告。

13・公益社団法人化推進と首都圏ブロックの支部化について(宮下)

会報『山』1月号「08年日本山岳会の課題」として掲載された問題について活発な意見が交わされた。支部化が山岳会の活性化に貢献すると、新生支部関係者から意見があつたが、公益法人化と密接な関連があるため常務理事会で検討をすすめる。

14・1月度入会者1名

ルーム日誌 1月

8日 図書委員会 アルパインスキークラブ

9日 集会委員会 山岳地理クラブ

10日 山の自然学研究会 九五会

11日 101の会

15日 常務理事会 総務委員会

自然保護委員会 ゆきわり会

16日 指導委員会 三水会 アル

パインスキークラブ

17日 アルパインフォトビデオク

ラブ 101の会

18日 海外委員会 学生部

21日 総務委員会 資料映像委員会

山研運営委員会

22日 インターネット小委員会

千葉支部 アルパインスキークラブ

23日 理事会 自然保護委員会

麗山会 山岳地理クラブ

24日 山遊会

25日 自然保護委員会 山の自然学研究会 アルパインフ

ォトビデオクラブ

28日 プモリの会

29日 図書管理委員会 海外登山

基金審査委員会 アルパ

インスキークラブ

30日 アルパインスキークラブ

31日 学生部

1月来室者461名

会員異動(1月)

物故

久我良房 (3312) 08・1・18

鈴木康義 (3766) 08・1・24

淡川舜平 (6642) 08・1・20

山崎直人 (8506) 07・9・12

市倉金蔵 (10197) 08・1・11

渡辺恭三 (11012) 07・12・19

会報『山』合本・製本のお知らせ 事務局

会報701～750号の合本をご希望の方は2008年2月末までに現本を事務局までお送り下さい。

1. 製本業者は前回(2003年10月)と同じです。
 - 全面同色(ブルーグレー)ハードカバー
 - 背表紙にタイトルと会員番号を印字
 - 索引は巻頭綴り
2. 欠号分は各号150円で補充可能です。
但しバックナンバーに在庫が無い場合にはコピーで代用になります。
3. 製本費用は梱包・返送費用を含めて4000円です。来室受取りの場合は800円引きですので、その旨をお書き添え下さい。代金支払いについては、書籍返送時(2008年4月頃)に振込用紙を同封します。
4. 過去の会報についてもお引受けします。
ご不明な点は事務局までお問合せ下さい。

退会	
田中幸男	(6386)
乾 好	(8233)
市川静子	(9030)
近藤シズ	(10093)
渡辺千之	(10895)
菊川忠雄	(11757)
山口久枝	(11995)
小田島和也	(12619)
嶋津義久	(13105)
國定陽之	(13217)
大屋喜重	(13746)
平田洋輔	(14249)
加藤真崇	(14422)
加藤麗子	(14423)
福岡	
関西	
岩手	
山梨	
北海道	
東九州	
岐阜	
宮崎	
宮崎	
宮崎	

◆2008自然保護全国集会

自然保護委員会

日時	4月19日(土)～20日(日)
会場	東京体育館(JR千駄ヶ谷駅前)
日程	■第1日(14時～)
宿泊	スクワール麹町(四ツ谷駅麹町口前)

I N F
O R M

インフォメーション

A I
O N

- 山の環境問題アンケートの結果報告及び討議
- 懇親会(プラザエフ・四ツ谷)

■第2日(9時～12時30分)

- シンポジウム「高山帯におけるシカの食害について考える」

費用

- ①宿泊・懇親会 1万2000円
- ②宿泊なし・懇親会 5000円
- ③討議・シンポジウムのみ 無料

申込

- 3月20日までに、費用①②③の区分を明記し、ハガキ、FAX、☎で川越尚子宛

〒185-0011 国分寺市本多3-7-1

TEL 042-321-6059

FAX 042-321-6059

*申込受付後詳細送付します。

◆後藤三男「油絵展」

春を待つ季節に、安曇野の四季と国内の山、南仏、ポルトガルの

日本山岳会会報 山 753号

2008年(平成20年)2月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 宮下秀樹
編集人 神長幹雄
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社

◆編集後記◆

●今月号は期せずしてヒマラヤの東、横断山脈の記事が重なりました。秩父宮記念山岳賞受賞の松本さんと、長年、この地域の踏査を続けておられる中村さんの原稿です。あたりまえのことですが、世界にはまだまだ未知、未踏の地域が残されている感を深めました。
(神長幹雄)

古都、ヨーロッパ・アルプス、ネパール・ヒマラヤの山岳画など新作40点余を展覧。
会期 3月9日(日)～15日(土)
(15日は16時にて閉会)
会場 東京交通会館B1・ゴール
ドサロン(JR有楽町駅前)
TEL 03-3321-5179 3
(3)